

Recitation Book

David Magalhães



Broken Heart:
Meditation on the
chorale melody
"Der du bist frei
in Ewigkeit"



Prelude / Choral:
Meditation on
"Jesu meine Freude"

Ecco moriro dunque
Busualdo di Venosa,
1596



Meditation on
"O Salutaris Hostia"
Gregorian Chant

Fantasy / Variations on
"Duch Adams Fall"



Masato Kumoi
SAX
Quartet

ヨハン・セバスティアン・バッハ／編曲：北方寛丈
Johann Sebastian Bach(1685～1750)/arr. Hirotake Kitakata
無伴奏ヴァイオリン・パルティータ 第3番
Partita No.3 for Unaccompanied Violin

1	前奏曲 Prelude	3:49
2	ルール Loure	3:02
3	ロンド形式のガヴォット Gavotte en Rondeau	3:22
4	メヌエットⅠ、メヌエットⅡ Menuet I, Menuet II	3:25
5	ブーレ Bourée	1:00
6	ジーグ Gigue	1:48

アレクサンドル・グラズノフ
Alexander Glazunov(1865-1936)
サクソフォーン四重奏曲
Quatuor(1932)

7	Ⅰ. アレグロ、ピウ・モッソ Allegro, Più mosso	6:43
	Ⅱ. カンツォーナ変奏曲 Canzona variée	
8	主題 アンダンテ Thema Andante	1:26
9	第1変奏 同じ速さで 1ère variation même mouvement	1:20
10	第2変奏 活気を持って 2me variation con anima	1:12
11	第3変奏 シューマン風、グラーヴェ 3me variation à la Schumann, Grave	3:08
12	第4変奏 ショパン風、アレグレット 4me variation à la Chopin, Allegretto	2:04
13	第5変奏 スケルツォ、プレスト 5me variation Scherzo, Presto	2:02
14	Ⅲ. 終章 アレグロ・モデラート、ピウ・モッソ Finale, Allegro moderato, Più mosso	6:28

デイヴィッド・マスランカ
David Maslanka(b.1943)
レシテーション・ブック
Recitation Book(2006)

15	打ち砕かれた心： コラール旋律「三つにして一つなる汝」による瞑想曲 Broken Heart : Meditation on the chorale melody "Der du bist drei in Einigkeit" (You who are three in one)	4:25
16	序奏 / コラール： 「イエスよ、わが喜びよ」による瞑想曲 Prelude / Chorale : Meditation on "Jesu meine Freude" (Jesus my joy)	4:34
17	ここで死にゆく！ (ヴェノーザ公ジェスアルド、1596) Ecco morirò dunque (Look! My death is near!) Gusualdo di Venosa, 1596	1:33
18	グレゴリオ聖歌 「おお、救い主なるいけにえよ」による瞑想曲 Meditation on "O Salutaris Hostia" (O Salvation's Victim) — Gregorian Chant	3:45
19	ファンファーレ / 変奏： 「アダムスの罪によりて」による Fanfare / Variations on "Durch Adams Fall" (Through Adam's Fall)	10:11

雲井雅人サククス四重奏団
Masato Kumoi Sax Quartet

ソプラノ：雲井 雅人
Soprano Masato Kumoi
アルト：佐藤 渉
Alto Wataru Sato
テナー：林田 和之
Tenor Kazuyuki Hayashida
バリトン：西尾 貴浩
Baritone Takahiro Nishio

2007年6月27、28日 影の国さいたま芸術劇場音楽ホールにて収録
Recording Date : 27,28 Jun, 2007
Recording Location : Saitama Arts Theater Music Hall
TOTAL TIME 65:41

Masato Kumoi
SAX
Quartet



写真提供=パイパーズ

Note

十数年前のこと、世界的なフルート奏者であるウィリアム・ベネット氏が、ある音楽雑誌のインタビューに答えて不思議なことを話しているのを読んだ。「ラとミを同時に鳴らしたとき、1オクターブ下にラの音が聞こえるはず」と。これが「差音」とか「結合音」と呼ばれる「第3の音」の存在を知った最初だった。演奏家として、私がそれを知るのは遅すぎたかもしれない。しかしそれ以降、彼の提唱する「差音を聴きながらの音づくり」の方法を実践するうち、自分の耳は徐々に開かれていったように思う。差音がピタッと合ったときの響きは、信じられないほど豊かで魅力的である。「たった2つの音でかような豊かな音が出せるのであれば、この方式で4声がぴったりと合ったなら、さぞや美しいハーモニーが生まれるに違いない」と考えて結成したのが、私たち「雲井雅人サックス四重奏団」である。美しい差音は、ピッチさえ合っていれば出るというものではなく、響きの整った雑音のない音同士でないとうまくいかない。この共通の認識こそが、私たちの四重奏団を支えるシンプルなのだ。

雲井 雅人

ヨハン・セバスティアン・バッハ／編曲：北方寛丈
無伴奏ヴァイオリン・パルティータ 第3番

J.S. バッハの音楽は、あらゆる全てを持ち合わせていると言って過言ではないだろう。民族・宗教・前衛・大衆・人間・自然……。あらゆる感情さえも含まれている。そんなバッハの音楽に魅せられた人たちが、今日まで様々なかたちで編曲してきているが、この曲も例に漏れず、多様なヴァージョンがある。かつて私（北方）がヴァイオリンで原曲を弾いた記憶が非常に生々しく残っており、その感覚を求めた結果が、このサクソ四重奏版となった。「前奏曲」は、もっとも難しく、もっとも輝かしい楽章。そこでは全てが露呈されていて、圧倒的で濃密な空間を作り出す。「ルール」は、アルト・サクソスがフューチャーされ、唯一バロック・スタイルを貫いている。「ガヴォット」は、ラフマニノフのピアノ用の編曲が素晴らしいので、それが更に活きるようなアレンジを心掛けた。「メヌエット」は、1つの旋律をバラバラに受け持ったり（音色旋律と言われる）、バグパイプを模したような響きが出てきたりと、優雅ではあるが、従来の踊り方では踊れないかもしれない。「プーレ」は、バッハに無礼なほどアレンジが加えられており、最後はほとんど崩壊寸前の寸劇のような楽章。「ジーク」は、また落ち着いた趣を取り戻して楽しく戯れる。ラストは4人のユニゾンで力強く幕が閉じられる。ガヴォットの説明で触れたが、ラフマニノフがプレリュード、ガヴォット、

ジークを編曲している。どれも素晴らしいが、あまり知られていないのがもったいなく、またサクソとの相性も良いと判断し、随所にちりばめた。生の讃歌のような曲だと昔からの想いがあった。原曲を貫くある種の幸福感を、違う角度、違う形でお見せできたら幸いである。 北方寛丈

北方寛丈プロフィール

1981年、石川県出身。愛知県立芸術大学音楽学部作曲科を首席で卒業。桑原賞受賞。作曲を鈴木英史、北爪道夫両氏に師事。ピアノを米谷昌美、北住淳両氏に師事。2005年、仙台フィルハーモニー管弦楽団第200回定期演奏会委嘱作品として、菅原拓馬氏との共作「コラゲン」が初演される。東京公演ライブはFONTECよりCD化されている(FOCD-9224/5)。2007年、「パーカッション・ミュージアム作品募集2007」採用作品として「フラメンコタムタム」(打楽器五重奏)が選ばれ初演された。吹奏楽・劇伴音楽・編曲も手掛ける他に、トランペット、ピアノ、ドラムセットのトリオ「TRI4TH(トライフォース)」のメンバーとして活動中。ジャンル垣根を越えた独自のサウンドを展開している。

アレクサンドル・グラズノフ
サクソフーン四重奏曲

アレクサンドル・グラズノフはその生涯の晩年に、サクソフーンのための作品を二つ残してくれた。そのひとつがこの「サクソフーン四重奏曲」である(もう一つは1936年の「サクソフーン協奏曲」)。健康状態の悪化、創作意欲の減退、ふるさとロシアへの郷愁(健康上の理由で滞在先のパリから離れられないでいた。結局パリにて客死)などでふさぎ込みがちだったグラズノフに、サクソフーンという楽器が新たなインスピレーションを与えたのだ。嬉々として作曲にいそしむ様子が彼の手紙に残されている。「サクソフーンのための四重奏曲を書くかと思っています。オーケストラでは、他の木管楽器群をほとんど覆ってしまうほどだ。ギャルド・レビュプリケーヌには、すごいサクソフーンのソリストがいる」、「以前は弦楽四重奏しか書いたことがなかったから、この曲の目新しさは私を本当にドキドキさせる。どのような響きがするのだろう」。また、マルセル・ミュールらのギャルド・レビュプリケーヌ四重奏団によるこの作品の試演に立ち合い、その演奏に対し賛嘆の意を表している。「演奏者たちは非常な名人ぞろい、これがジャズで聴かれる同じ楽器だとは到底思われない。私が心から感銘を受けたのは、彼らの息づかいと疲れを知らぬ体力、軽やかな響き、そして

明快なイントネーションだ」。1930年代は、サクソフーンのための名曲が次々に生まれた時代である。それらの作品(ラーション、マルタン、イベールなどの諸作品)が難曲ぞろいであることも注目される。そのことは、新しくクラシック音楽の世界に登場したこの楽器に対する、当時の作曲家たちの期待がいかに大きかったかの証左とも思われるのだ。晩年のグラズノフが、サクソフーン四重奏という新しい合奏形態にいかにか大きな夢を託したかが、この曲からも伝わってくる。第1楽章は、まさにサクソフーンに対する期待感にあふれたオープニング。同族楽器のアンサンブルの特徴を生かし、委曲を尽くした緊密な旋律の重なりが連綿と続く。4分の3拍子の中のヘミオラの多用が、この楽章に変化と躍動感を与えている。第2楽章は、親しみやすい主題とそれに続くアイデアに満ちた5つの変奏からなる。執拗なほどのアーティキュレーションや発想記号の書き込みから、創作中のグラズノフがあふれるイメージを抱えながらこの曲を書いていたのを感じさせる。この楽章は単独でも演奏されることがあり、その場合、終曲となる第5変奏は、しばしばプレスティッシモで奏される。第3楽章は、ミュールたちパリの演奏家に向けてであろうか、比較的小い「ギフト」のような性格を持つように感じられる。都会的でややセンチメンタルなモチーフが、幸福な大団円に向かって徐々に表情を変えてゆくのを、奏者は味わいながら吹くことになる。

デイヴィッド・マスランカ レシテーション・ブック

雲井雅人サククス四重奏団は、2007年4月11日から20日にかけて、アメリカ・ツアーを挙行了した。訪れた地はイリノイ州のノースウエスタン大学、ニューヨーク州のイーストマン音楽院とクレーン音楽学校、オハイオ州のシンシナティ音楽院、インディアナ州のインディアナ大学の5ヶ所であった。このツアーの最大の目的は、私たちが委嘱した「サクソフォーン四重奏のための『レシテーション・ブック』」を、作曲家デイヴィッド・マスランカの眼前で世界初演することだった。ノースウエスタン大学でその彼のマスタークラスに参加し、私たちのリハーサルに立ち合ってもらい、共に食事や散歩をしたりして、彼の人柄に触れることができた。そのことが作品の解釈を深め、この世界初演は大きな成功を収めたように思われる。いずれのコンサート会場でも、この作品は大きな驚きを持って受け止められた。マスランカは非常に物静かな人物で、話し声もひそやかだ。しかし、その心のうちにある強い信念のようなものを、実際に会うことによって感得できた気がする。また、彼がマスタークラスで繰り返し語った「心をオープンにして、曲の中に起きていることに耳を澄ますように。そのように心を鋭敏な状態にして世の中で生きて行くことは大きな痛みをとまなうが、芸術家にとっては必要なことだ」という言葉は、私の心に永く残ることだろう。レ

シテーション・ブック(読誦集)とは、キリスト教の典礼で唱えられる文句を集めたものである。この作品では、宗教的な美しいコラールのあいだに、しばしば現代に生きる等身大の人間の独白のような歌が現れる。このようなとき、演奏者はこの作品を演奏することを通じて、自然に自分の心の内側を見つめ直すことになるのだ。第1楽章、寄り辺なき魂がこのように歩みだし、このように思索を始める。第2楽章、自分を無にし、超越者に身を委ねる恍惚感に支配されている。第3楽章、マドリガーレ「ここで死にゆく!」の引用。作曲家カルロ・ジェズアルド(1560-1613)は、後期ルネサンス期のイタリアの音楽家にしてヴェネーサ公国君主、大胆な表現技法の作曲家かつ殺人者という極端な人生を生きた人物。愛と死を歌う詩の内容(セクシャルな隠喩に満ちている)が、驚くべき斬新な和声で表されている。第4楽章、あたかも中世の僧院に響くがごとく単旋律のグレゴリオ聖歌をテナー・サククスが奏で、それが徐々に多声化されていく。第5楽章「アダムの墮落によりて」のファンファーレは、ルネサンス期フランドルの画家ヒエロニムス・ボスの代表作「快楽の園」(The Garden of Earthly Delight)に響くラッパのごとく鳴り渡る。「アダムの墮落によりてことごとく腐れたり」というのが、コラールの本来の題名であるが、どういう訳か、ここでマスランカはそのセンテンスの後半を省いている。この楽章は腐るどころか、莫大な情熱の積み重ねが音楽を最後まで現世的(earthly)な達成感に導いていく。

Ecco, moriro dunque!
Ne fia che pur rimire,
Tu ch'ancidi mirand, il mio morire.

今ここに、私は死にゆく!
悩ましき貴女のまなざし、
その瞳も、私が逝くのを見届けることはあるまい。

2007年4月、私は雲井雅人サククス四重奏団のメンバーたちと念願の出会いを果たし、また私の「レシテーション・ブック」の世界初演に共に取り組むという非常な喜びを味わった。彼らはすばらしい演奏家であり、力を合わせて世界屈指のサクソフォーン四重奏団を築き上げた。その演奏は才気あふれるものである。アンサンブルは極めて繊細かつ精密であり、パッションとパワーに裏打ちされている。聴衆は始めから終わりまで彼らの演奏に魅入られたように聴き入ると、やがて立ち上がって拍手を送った。この作品がこのように真に生きた姿で演奏されるのを目の当たりにすることができて、私にとってこれほどの大きな喜びはない。

デイヴィッド・マスランカ



Masato Kumoi SAX Quartet

Profile



【雲井雅人サックス四重奏団】 Masato Kumoi Sax Quartet

ソプラノ・サクソフォーン／雲井雅人
アルト・サクソフォーン／佐藤 渉

テナー・サクソフォーン／林田和之
バリトン・サクソフォーン／西尾貴浩

雲井雅人を中心に、同門ならではの均質な発音から生まれる美しいハーモニーを目指して、1996年に結成された。2000年12月、三鷹市芸術文化センター風のホールでデビュー・コンサートを開催。それ以来毎年定期演奏会を開催し、2007年5月で第6回を数える。2002年には、デビューCD「マウンテン・ロード」をリリース(バンドジャーナル誌特選)。2004年3月、浜離宮朝日ホールで「メント・モリ」と題してコンサートを開催。2004年12月、銀座王子ホールで「ダンサブル・サックス」と題してコンサート開催。同年、セカンドCD「チェンバー・シンフォニー」をリリース。2007年、上海およびアメリカ各地でコンサート・ツアーを行なった。

Member Profile

Masato Kumoi



ソプラノ・サクソフォーン
雲井 雅人

1957年、富山県生まれ。国立音楽大学を経てノースウエスタン大学大学院修了。その間、第51回日本音楽コンクールおよび第39回ジュネーヴ国際音楽コンクールで入賞した。1984年、東京文化会館小ホールでリサイタル・デビュー。オーケストラのソリストとしては、1991年、サントリーホールで、井上道義指揮の新日本フィルハーモニー交響楽団と共演した。以後ソリストとして、京都市交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、名古屋フィルハーモニー管弦楽団、北京中央楽団(中国)などと共演している。2005年、「サイトウキネン・フェスティバルin松本」および「なにわオーケストラ・ウインズ」メンバー。ソロCDに「ドリーム・ネット」(バンドジャーナル誌特選)、「雲井雅人、あふれる歌へのオマージュ」、「シンプル・ソングス」(レコード芸術誌特選)がある。大室勇一、フレデリック・ヘムケの各氏に師事。尚美学園大学、愛知県立芸術大学、国立音楽大学各非常勤講師、亜細亜大学吹奏楽団コーチ。「雲井雅人サクソス四重奏団」および「コレジオ・サクソス」主宰。1996年、富山県ひとづくり財団より「とやま賞」(芸術文化部門)受賞。

Soprano Saxophone : YAMAHA YSS-875G/F1R-GP Neck,
Mouthpiece : Selmer S80-D,
Reed : Vandoren Traditional 3,
Ligature : WoodStone Copper

Wataru Sato



アルト・サクソフォーン
佐藤 渉

1975年、東京都生まれ。1994年、シンシナティ音楽院入学。1996年、北米サクソフォーン・コンペティション第3位入賞。在学中コンチェルト・コンペティションに2度優勝し、同校フィルハーモニック・オーケストラおよびウィンド・シンフォニーと共演。1998年、ノースウエスタン大学大学院に入学。在学中コンチェルト・コンペティションに優勝し、同校フィルハーモニック・オーケストラと共演。1999年、同大学院修了。サクソフォーンを彦坂眞一郎、須川展也、リック・ヴァンメーター、フレデリック・ヘムケ、雲井雅人の各氏に師事。CD「The Orpheus Oracle」(Vienna Modern Masters 3046)にコンチェルトのソリストとして参加。帰国後は東京エリアでフリーランスの奏者として、演奏活動を行うがたわら、吹奏楽団の指導にもあたっている。

Soprano Saxophone : YAMAHA YSS-875G/F1R-GP Neck,
Mouthpiece : Selmer S80-D,
Reed : Vandoren Traditional 3,
Ligature : WoodStone Copper

Kazuyuki Hayashida



テナー・サクソフォーン
林田 和之

1973年、京都府生まれ。尚美学園短期大学を経て1997年、東京ミュージック&メディアアーツ尚美ティプロマ・コース修了。1995年、東京文化会館新進音楽家オーディションに合格。1998年、第2回アドルフ・サクソス国際コンクール第6位入賞。王立ワロニー室内オーケストラとコンチェルトを共演する。同年、青山財団より「バロックザール賞」受賞。1999年、第16回日本管打楽器コンクール第1位入賞。飯森範規指揮の東京交響楽団とコンチェルトを共演する。2003年、榊原栄指揮の新日本フィルとヴィラ・ロボス「ファンタジア」を共演。2004年、「サイトウキネン・フェスティバルin松本」メンバー。「久石譲&ワールド・ドリーム・オーケストラ」のCDレコーディングとツアーに参加。2006年、「なにわオーケストラ・ウインズ」メンバー。「久石譲 Asian X・T・C」CDレコーディングとツアーに参加。オーケストラ内のサクソフォニストとして、新日本フィルハーモニー交響楽団にしばしば登場している。サクソフォーンを雲井雅人氏、室内楽を服部吉之・真理子夫妻に師事。東京ミュージック&メディアアーツ尚美ティプロマ・コース、尚美学園大学各非常勤講師。

Tenor Saxophone : YAMAHA YTS-875G1 Neck,
Mouthpiece : Selmer S80-180,
Reed : Vandoren Traditional 3 half,
Ligature : BG Traditional lacquer,
Neck Strap : Bois-Chaux f.Bird BE-BOP-COMFORT

Takahiro Nishio



バリトン・サクソフォーン
西尾 貴浩

1973年、北海道生まれ。1996年、愛知県立芸術大学卒業。在学中、同大学定期演奏会および卒業演奏会に出演。1998年、東京コンセルヴァトアール尚美ティプロマ・コース修了。同年、青山財団より「バロックザール賞」を受賞。1999年、東京文化会館新進音楽家デビュー・コンサート・オーディションに合格。2002年、第3回アドルフ・サクソス国際コンクールにおいてセミ・ファイナリスト。2006年、「久石譲 Asian X・T・C」CDレコーディングとツアーに参加。現在、東京エリアでフリーランスの奏者として演奏活動を行っている。サクソフォーンを雲井雅人氏、室内楽を菅原暁、中川良平、村田四郎の各氏および服部吉之・真理子夫妻に師事。「東京吹奏楽団」、「銀河管弦楽団」各メンバー。

Baritone Saxophone : YAMAHA YBS-62II,
Mouthpiece : Selmer S80-F,
Reed : Vandoren Traditional 3,
Ligature : Rovner Eddie Daniels II,
Neck Strap : Brancher

About fifteen years ago, I read an interview with a great British flutist, William Bennett, in a Japanese wind instrument magazine. He was talking about a strange phenomenon saying that when the notes A and E are played together you will hear another A an octave below. It was the first time I learn about the existence of this third note, the "difference tone". As a musician, it might rather late to know it but since then I have been pursuing the tone development through "listening to the difference tone" as Mr. Bennett suggested. I noticed my ears were getting fine-tuned through the process. When you tune the difference tone perfectly the resulting sound is amazingly rich and beautiful. I thought that if we can make such rich sound with two notes then we should have wonderful harmony with four perfectly tuned voices. The idea soon yield our ensemble, "Masato Kumoi Saxophone Quartet". You cannot get a right difference tone with only the tones in the correct pitches: you need clear and healthy tones with good intonation. We share the knowledge as the principle of our quartet.

Johann Sebastian Bach / arr. Hirotake Kitakata
Partita No.3 for an Unaccompanied Violin

Music of J. S. Bach (1685-1750) contains every aspect of life/ethnicity, religion, avant-gardism, humanity, nature and any kind of emotion. Works of Bach have attracted many to arrange them into various forms. This partita is not an exception and there are many versions. I (Kitakata) cannot separate the piece from the memory of playing it with the violin in the past and I try to reproduce the feeling when I arrange it for the saxophone quartet.

The Prelude is the most brilliant and difficult movement. It is very explicit and creates an overwhelming and dense atmosphere. In Loure the Alto takes the lead. This is the only movement arranged entirely in the Baroque style. I was inspired by Rachmaninov's magnificent arrangement for the piano when I arranged the Gavotte. I developed his approach further. In the Minuet a technique called "tone-color-melody", in which a melody is passing from one instrument to another, is used. In some places the quartet sounds like the bagpipe. It is a graceful movement but it might be impossible to dance with it in an authentic way. Bourree could be considered as a dishonorable treatment of a Bach. In the end it becomes like a nearly disinte-

grated comedy. In Gigue the order is restored again and it is a playful fun movement ending with a unison of four saxophones.

As I mentioned above, Rachmaninov arranged the Prelude, Gavotte and Gigue of this partita. I found this great but unfortunately less-known arrangement is also work fine with the saxophone and I borrowed fragments of it among mine.

I always consider this music as a praise to life. I hope my arrangement can express, from a different angle or with a new form, a certain feeling of euphoria which the original piece possesses. (Hirotake Kitakata)

Alexander Glazunov
Quatuor

Alexander Glazunov (1865-1936) has left us two pieces for saxophone in his last years. One is the present *Saxophone Quartet* (1932) and the other is the *Concerto for Saxophone* (1936). His declining health, weakening enthusiasm for composing and nostalgia for Russia (he could not leave Paris where he resided because of the illness and eventually died there) made him dispirited. The saxophone, however, gave him fresh inspiration. The remaining letters of his depict the composer

excitedly embarking on a new project. He wrote, "I have an idea to write a quartet for saxophones. These instruments are distinctively audible; in the orchestra they even cover regular woodwinds by their sound. There are great saxophone soloists in the band of the National Guard." "The novelty of this work really thrills me, because I was formerly writing only string quartets. I don't know how it will sound." (English translations of Glazunov's letters are quoted from Andre Sobchenko: "Letters from Glazunov: The Saxophone Concerto Years," *Saxophone Journal*, Sep/Oct 1997) He was present when his quartet was rehearsed by the Quatuor of the Garde Republicane, in which Marcel Mule was a member. He was impressed by their performance and wrote in a letter, "The performers are such virtuosi that it is impossible to imagine that they play the same instruments as we hear in jazz (Glazunov's misspelling). What really strikes me is their breathing and indefatigability, light sound, and clear intonation."

The 1930's is the time when masterpieces were written for the saxophone. Such works as those by Larsson, Martin and Ibert uniformly require high level of technical skills and I think it suggests the composers' high expectations for this new instrument which had just arrived in classical music.

We can see in this piece that aged Glazunov saw good future prospects of the saxophone quartets. The first movement starts with a buoyant opening followed by the series of elaborate intertwining passages. Recurring hemiolas in the three-four time make this movement fluid and animated. The second movement consists of an intimate theme followed by five interesting variations. Abundant, or even obsessing articulation and expressive markings in the score implies that the composer was full of inspirations while working on this. Sometimes this movement is performed independently, often with the last (fifth) variation in prestissimo. The third movement seems to be a small "offering" to Mule and other saxophonists in Paris of the time. Performers can enjoy playing the urban yet a bit sentimental theme which is developing into the joyous finale.

David Maslanka
Recitation Book

11th to 20th April 2007, our quartet was on tour in the USA. We visited the Northwestern University in Illinois, the Eastman School of Music, the Crane School of Music in New York, the Cincinnati College-Conservatory of Music in Ohio and the Indi-

ana University in Indiana. The most important aim of our tour was to premiere the *Recitation Book* (2006) in front of the composer, David Maslanka (b.1943). We joined his masterclasses in the Northwestern University, rehearsed, dined and walked with him, having a chance to know him in person. The experience deepened our understanding of his music and seemed to contribute to the successful premiere of the piece. In every concert, the audience welcomed the piece with praise and amazement. Mr. Maslanka was a calm man who spoke quietly but we recognize him as a man of strong will. I will remember what he repeatedly mention in his masterclass. He advised to open our mind to see what is happening in the music though it can be painful to live with a sensitive mind. He said it is a requirement for an artist. In the first movement, a lone spirit starts to progress and think. The second movement is dominated by the ecstasy to consign oneself to the transcendent being. The third movement uses quotations from a madrigal, "Look! My death is near!" written by a late Renaissance Italian composer, Carlo Gesualdo, Prince of Venosa, who is not only known for his experimental and expressive music but also for his notorious murders. The original verse of love and death with full of sexual metaphors was arranged

with amazing harmonies. In the fourth movement the tenor saxophone recites a monophonic Gregorian chant that is gradually developed into polyphony. In the fifth movement, "Through Adam's Fall," a fanfare resounds like the trumpet blasts in *The Garden of Earthly Delights* by a Renaissance painter, Hieronymus Bosch. The original title of the choral is "Durch Adams Fall ist ganz verderbt" (Through Adam's Fall, Is All Lost). Somehow Maslanka omitted the second half of the sentence. Far from being "lost," the movement leads accumulation of numerous sounds into the climax of an earthly achievement.
(Masato Kumoi)

In April of 2007 I had the great pleasure of finally meeting the members of the Masato Kumoi Saxophone Quartet, and to work with them on the premiere performance of my "Recitation Book."

They are wonderful players, and together make up one of the finest saxophone quartets in the world.

The performance was brilliant. The ensemble was extremely sensitive and precise, and played with passion and power.

The audience was held in rapt attention from start to finish, and then rose to a standing ovation.

It was a tremendous joy for me to have this music come so fully alive. Bravo Kumoi Quartet!

David Maslanka

Masato Kumoi Sax Quartet

Soprano Saxophone: Masato Kumoi
 Alto Saxophone: Wataru Sato
 Tenor Saxophone: Kazuyuki Hayashida
 Baritone Saxophone: Takahiro Nishio

Founded in 1996 by Masato Kumoi, the quartet aims for homogeneous sound created by the saxophonists belonging to the same school. They made their debut in Tokyo in December 2000 since then the members remain the same and having held concerts regularly. In 2002, the quartet's first CD, *Mountain Roads*(CAFUA CACG-0039) was released. In 2004 they held a concert in Hamarikyu Asahi Hall under the title of "Memento Mori" and in Ginza Oji Hall under the title of "Danceable Sax". In the same year they made a CD, *Chamber Symphony*(CAFUA CACG-0074). In 2007 they toured Shanghai and USA.

Biographies

Masato Kumoi (born 1957, in Toyama, Japan)
 Masato Kumoi entered Kunitachi College of Music, Tokyo in 1977. After his graduation in 1981 he went abroad to study in the graduate school of Northwestern University in Illinois, U.S.A. During that time he won the third prize of the 51st Japan Music Concours. In 1983 he received a master degree from the university and aquired the silver medal of the 39th International Competition for Musical Performers, Geneva. In 1984 he had his first recital at Tokyo Metropolitan Hall. In 1991 he performed with the New Japan Philharmonic conducted by Michiyoshi Inoue in the Suntory Hall. Since then has played many solos with orchestras including the Kyoto Symphony Orchestra, Kansai Philharmonic Orchestra, Nagoya Philharmonic Orchestra, and Beijing Central Orchestra, China. In 2005 he performed in Saito Kine Festival in Matsumoto, Japan and Naniwa Orchestral Winds. His solo CDs include *Dream Net*(CAFUA CACG0075), *Saxophone Meets Franz Schubert* (Alquimista ALQ0008), *Simple Songs*(CAFUA CACG0093). He studied the saxophone with Yui-chi Omuro and Frederick Hemke. Currently he teaches at Kunitachi College of Music, Aichi Prefectural University of Fine Arts and Music and Shobi University. He coaches the Asia University Wind Band. He leads the Masato Kumoi Saxophone

Quartet and the Collegio Sax. In 1996 he won the Toyama Prize from the Toyama Foundation.

Wataru Sato (born 1975, in Tokyo, Japan)

Wataru Sato entered the University of Cincinnati College-Conservatory of Music (UC-CCM) in 1994. In 1996 he won third prize in the North American Saxophone Alliance Classical Saxophone Competition. While he was in the university, he won UC-CCM Concerto Competition twice, and performed with the Wind Symphony and Philharmonic Orchestra. He was a member of UC-CCM Contemporary-music Ensemble and went to Portugal on tour with them in 1998. In the same year, he entered the graduate school of Northwestern University. He performed with Philharmonic Orchestra of the university as the winner of the Concerto Competition. In 1999 he graduated the graduate school of the university. He studied the saxophone with Shinichiro Hikosaka, Nobuya Sugawa, Rick van Meter, Frederick Hemke and Masato Kumoi. He was a soloist of a concerto in the CD, *The Orpheus Oracle*(Vienna Modern Masters 3046). He has been active in Tokyo as a freelance soloist, chamber musician, and orchestral saxophone player. He also coaches wind bands and is a member of Fellow Saxophone Ensemble.

Kazuyuki Hayashida (born 1973, in Kyoto, Japan)

Kazuyuki Hayashida graduated from Shobi-Gakuen Junior College in 1995 and completed the Graduate Course of Tokyo Conservatoire Shobi in 1997. He won the Saitama Hall Competition in 1994 and the successfully passed the Tokyo Metropolitan Hall Audition in 1995. In 1998 he won sixth prize of the second Concours International Adolphe Sax. In the same year he received the Baroque Saal Prize from the Aoyama Institute. In 1999 won the first prize of the 16th Japan Wind and Percussion Competition and performed a concerto with the Tokyo Symphony Orchestra conducted by Norichika Ilmori. In 2003 he performed the Fantasia by Villa-Lobos with New Japan Philharmonic conducted by Sakae Sakakibara. In 2004 he he performed in Saito Kine Festival in Matsumoto, Japan, and joined the recording and tour of "Jo Hisaishi and the World Dream Orchestra". In 2006 he was a member of Naniwa Orchestral Winds and joined the recording and tour of "Jo Hisaishi Asian X.T.C." He has frequently performed in New Japan Philharmonic as well as in chamber music and as soloist. He studied the saxophone with Masato Kumoi, chamber music with Yoshiyuki Hattori and Mariko Hattori. He currently teaches at the Graduate Course of Tokyo Conservatoire Shobi and Shobi University.

Takahiro Nishio (born 1973, in Hokkaido, Japan)
Takahiro Nishio graduated from Aichi Prefectural University of Fine Arts and Music in 1996. While he was there he was chosen to perform in an annual and graduation concerts of the university. In 1998 he completed the Graduate Course of Tokyo Conservatoire Shobi. In the same year he received the Baroque Saal Prize from the Aoyama Institute. He successfully passed the Tokyo Metropolitan Hall Audition in 1999. In 2002 he was a semifinalist in the third Concours International Adolphe Sax. In 2006 he joined the recording and tour of "Jo Hisaishi Asian X.T.C." He has been active as a freelance saxophonist in Tokyo. He studied the saxophone with Masato Kumoi, chamber music with Hitomi Sugawara, Ryohei Nakagawa, Shiro Murata, Yoshiyuki Hattori and Mariko Hattori. He has been a member of Tokyo Symphonic Band, The Milky Way Orchestra.

Text by Masato Kumoi, translated by Jun Sasai



Recitation Book

David Maslagha

Recording Date : 27,28 June 2007

Recording Location : Saitama Arts Theater Music Hall

Producer : Hiroshi Kasai

Recording Director : Kenji Fukuda

Balance Engineer : Kenji Fukuda

Assistant Engineer : Kiyomi Okuno

Miho Hayano

A & R : Miho Hayano

Editor : Kenji Fukuda

Art Direction & Design : Fumiaki Ueno

Photo : Yasunori Hasegawa

<http://www.cafua.com>

HDCC

HDCC は、High Definition Compatible Digital の略で、米国Pacific Microsonics社が開発した、従来のCDフォーマットと互換性のある高品位デジタル録音・再生方式です。この方式では、高度なDSP技術を用いることにより、多量の情報をリアルタイムに解析し、従来のCDフォーマットを大幅に超えた、最上級のマスター・レコーダーに迫る音楽再現が可能です。HDCC 方式で記録されたディスクは従来のCD録音・再生装置と完全に互換性があり、通常のCDプレーヤーでも再生できます。さらに、HDCC デコーダーを内蔵した再生装置では、HDCC の高解像度、低歪の特性をフルに生かした高品位再生が可能となります。

<取り扱い上のご注意>●ディスクは両面とも、指紋、汚れ、キズ等をつけずに取り扱ってください。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向けて放射状に軽くふき取ってください。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。●ディスクは両面とも、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。<保管上のご注意>●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。●プラスチックケースの上に重いものを置いたり、落したりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。

Recitation Book
David Maslanja

Masato Kumoi
SAX
Quartet